

《私の1枚》～研修を振り返って～

●越沼 有子(栃木市立合戦場小学校)



「心温まる朝ごはん」

ホームステイ先の村での出来事。朝、散歩をしていたら、托鉢のお坊さんに出会いました。後をついていくと、お寺で朝ごはんを食べるようでした。すると、一緒にいた女性の方々が、見知らぬ私を朝ごはんに招待してくれたのです。ラオスの人の温かさがつまった朝ごはん。おいしかったな～。

●深澤 菜月(栃木県立栃木特別支援学校)

「手織りの布」

ホームステイ先のママが、作った織物を見せてくれました。華やかでありながらも落ち着いた色合いの布は、とても美しかったです。私も手織り体験をさせてもらいましたが、複雑な模様をつくるのは難しく、まさに職人技！と感じました。



●川田 雅俊(守谷市立守谷小学校)



「ゾウムシを食べる」

人生で食したことがないゾウムシ。しかしラオスでは5歳未満の慢性的な栄養失調を改善するためのプロジェクトの一環として、昆虫食が導入されている。異文化理解のため、そして日本の子供達に感想を伝えるため、抵抗は多いにあったものの、勇気をしぼり、いざ実食。外はカリッと、中はクリーミーな甘さがありました。

●樽井 里実(宇都宮市立姿川第二小学校)

「自然とともに暮らすドンコー村」

夜更かしをすることもなく床に就き、朝日とともにニワトリの声で起きる。目の前の田んぼで採れたお米と、目の前の川で獲れた魚を食べ、貯めた雨水を使うくらし。機織りをして、布も織る。ホームステイ先のお母さんは家族と、この場所が大切なんだそうです！



●田母神 亘(大田原市立金田北中学校)



「ドンコー村の子どもたち」

人口350人の村で生活する子どもたち。言葉が通じなくても、こちらの身振り手振りに目をキラキラと輝かせて反応してくれる元気で純粋な姿に、感動しました！また会いたいね！

●土屋 啓一(取手市立戸頭中学校)

「戦争の傷はいつ消えるのか」

コープ・ビジターセンターでの1枚。整然と並べられている義足。よく見ると使い古されており、大きさもばらばらである。素材は木製や竹製、金属製である。これはベトナム戦争時にアメリカ軍がラオス国内に投下したクラスター弾が、まだ不発弾として国内に残っており、その被害にあった方々の義足である。中には不発弾の金属を使った義足も展示されていた。こんな理不尽なことが許されるのだろうか。幸い、日本が不発弾の処理や義足の製作に関わっている話を聞いたことが唯一の救いであった。



●白澤 拓也(豊里学園つくば市立上郷小学校)



「自分にできること」

ほとんど整備されていないこの道路を日本の企業が整備したそう。近隣に住む人々は、日本人に非常に感謝しているという。そんな話を聞いて、今までラオスのことを知らうともしなかった自分が恥ずかしくなった。

●柳橋 春和(茨城県立並木中等教育学校)

「おもてなし」

ホームステイ先のマザーとの一枚。マザーは一人暮らしでしたが、おいしい食事や快適な寝室など、様々なおもてなしをしてくれました。夜眠りやすいように、1.5mくらいある巨大扇風機を2つも用意してくれたおかげで、ぐっすり眠ることができました。



●越沼 有子(栃木市立合戦場小学校)



「折り紙がじょうず！」

交流授業で日本の七夕を紹介。一緒に小学生と折り紙をしました。手先が器用な子が多くて驚きました。また、持参したハサミの数が人数分なかったのですが、子どもたちは友達が使い終わるまで待ったり、先に貸してあげたりしていました。そんなラオスの子どもたちの姿に、何か大切なことを教えてもらいました。

●深澤 菜月(栃木県立栃木特別支援学校)

「ラオス手話講座」

さまざまな障害のある人が一緒に働くカフェで、聴覚障害の店員さんが手話講座を行ってくれました。普段からこのカフェでは、手話を知ってもらうために開かれているそうです。この写真の手話は「また会いましょう！」という意味。日本の手話と似ているところもあり、興味深かったです。



●川田 雅俊(守谷市立守谷小学校)



「ラオスのおばあちゃん」

ドンコー村にて。お家の縁側のような場所で夕涼みをしていたところ、おばあちゃんが枕を貸してくれたり、雨で濡れないように傘をかしてくれたりした。Google翻訳を使いながら、家族の写真を見せたりして交流した。この撮った写真を見せたところ、すごく喜んでくれた。会話のキャッチボールはほぼなかったが、言葉や文化を超えて、人と繋がれたなあと感じる瞬間だった。

●樽井 里実(宇都宮市立姿川第二小学校)

「スポーツと就労で自立を目指す」

「スポーツで仲間をつくり、自己肯定感を育む」「働くことによって社会的スキルを身に付ける」この二つを組み合わせることで、障がいのある人の自立を目指していた。ラオス代表のパラリンピック選手も働くこのお店のみなさんは、とてもいい表情をされていた。



●田母神 亘(大田原市立金田北中学校)



「日本文化の紹介」

ラオス国立大学の日本語学科の大学生。とっても日本語が上手で、日本文化にも詳しい！日本の中学校の様子カルタを交えて紹介すると、ラオスとの共通点や違いを探しながら、興味津々な様子で取り組んでくれました。

●土屋 啓一(取手市立取手市立戸頭中学校)

「昆虫食が貧困を救う」

ISAPHの石塚さんから話を聞いた直後の1枚。ゾウムシの幼虫である。見た目はぞっとするが、食べてみるとエビに近い食感で、濃厚な味である。日本では昆虫食は珍しいが、世界の4分の1は昆虫を食べているらしい。ラオスでは日常で食べられており、栄養も高いようである。また家畜と違い、初期費用や広大な土地が必要ではないので、副業などのビジネスチャンスにもなるという。実際、日本でも高価で販売されている。昆虫をビジネスにする石塚さんの発想の豊かさに感心をすると同時に、食文化の多様性を感じた出来事であった。



●白澤 拓也(豊里学園つくば市立上郷小学校)



「私たちの常識は世界の非常識？」

「昆虫食べるのー？ムリー！」渡航前、多くの人に言われた。ラオスで昆虫食のことを知り、学び、当たり前にもコオロギを食べた。帰国後、「昆虫食べたのー？すごーい！」その言葉になんだか違和感を感じた。

●柳橋 春和(茨城県立並木中等教育学校)

「初めての機織り体験」

ドンコー村で体験した機織り。はじめは難しかったけれど、徐々に慣れてきて、模様が少しずつ出来上がっていくのを見ると、とてもわくわくしました。

完成した織物で素敵な手提げ付きのバッグとスマホケースを作ってもらいました。

